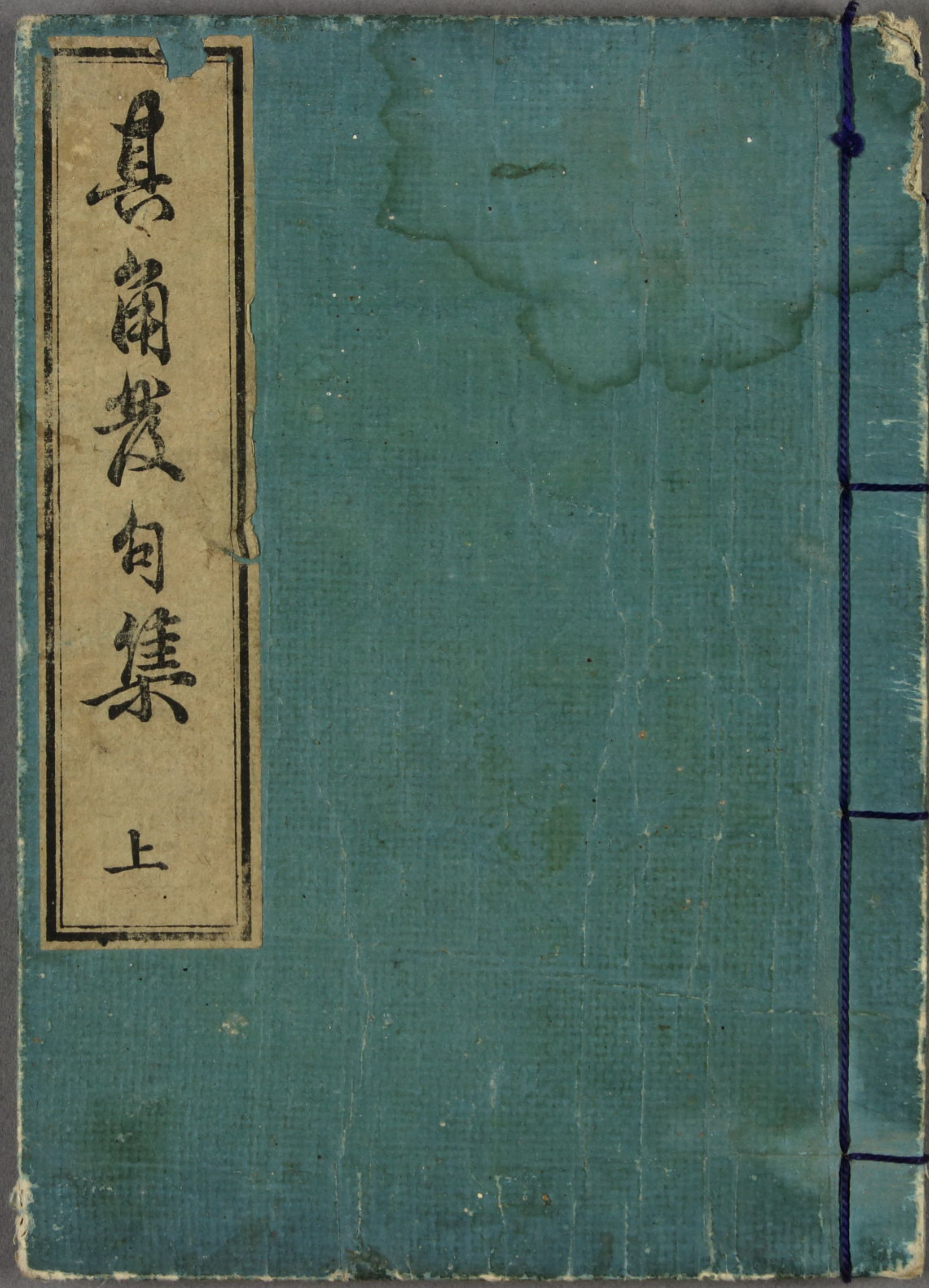


具角叢句集
上



其角叢句集

附千代女句集

明治十六年
五月補刻

文玉圃梓



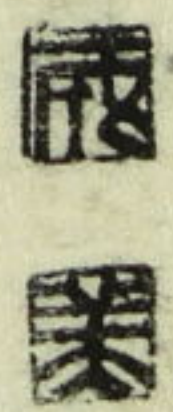
其角と嵐雪と冬菴中の表と
ありと蕉翁の称と中と世と天下の
概李ととく公と門子存との心と
と人との心と此とありと一雙の
名家ありと世人も人死赤ん坊やう
おもしろたきとと此中ありとと
劣らざるありとととととと

嵐雪ハ風雅子禪味哉この子ハ無門乃
算も法もたれりゆく世理能ふあそひ
子里独歩此筆性あ梨晋子ハ志学の
年ハ重功もつて年ほくら身の内ハ
既子次韻の作者才由れを造たりかく
執昔古の心あつまう人に酔郷糸入ん
いよく音緒大哉おや後あすお乃つ
松の尾形神志助何家やこやも

人哉以女をてよしとてんしやうに人の心
およふ海に妙を身呈れさる嵐雪
下にあむ事あつたる心よ羽も能
此れ定家卿ありと賞言しさいやう
中ハ此人亦及んじと名来ぬぬの川きぬ
すんく洞達能中尔ほそとありて句
みぬ自在をほくもり誰の人と世に歌
るもの何とせや此れ後句集紙板子刺に

懐子ひきつゝけにこしから公けく
志つて学者に便あるをむくまふを
事つてゆく臨流求むる魚をこゝやとて
細をむくまふ筆此書とゆたえとてた
ら子百尺竿頭子安んずる梨しとて

随齋成美序



序

其角菰句集

春之部

坎窩久感考訂



日の暮りて残さるる子鶴乃阿也之哉
鐘ひつり賣れぬ日ハな〜江戸の春
雁さるも阿達歌劇生〜子と鶴とる

題黄金

目下金一丁一万枚は時代昔の昔
世の中能栄標も鼻をとめあはれ
松の〜伊勢〜家〜人〜誰

新町子居張うわして

けあひの松もかゝる記事あり
あゝ川や家中に礼を星月
あゝ夜乃ほのりよう連し姫のきこ
元日や月見ぬ人共 橋にわ
元日の岸まで 十乃指く後し
とふりや虫め時を裏四 夫 下

手_二握_一蘭口_三含_二雞_一舌_三

由_二川_一の_二糸_一や_二口_一子_二か_一く_二こ_一て_二筆_一は_二め
海_二ま_一に_二分_一野_二是_一も_二如_一春_二の_一物_二も_一い

さ_二砂_一位_二の_一い_二志_一松_二茂_一古今_二万_一年_二未_一た_二め
く_二ま_一ひ_二地_一し_二り_一女_二う_一を_二の_一ん_二連_一致_二子
つ_二ま_一の_二松_一の_二枝_一葉_二百_一間_二子_一あり
諸_二木_一も_二好_一き_二色_一を_二依_一証_二な_一し
蓬_二菜_一能_二ま_一ら_二付_一た_二て_一も_二如_一曾_二根_一の_二松

蓬菜の讚

崎_二を_一も_二尚_一三_二の_一書_二院_一乃_二か_一や_二あ_一る
庭_二電_一牛_二も_一靴_二賣_一を_二り_一も_二を_一

春王正月老

生死_二を_一も_二の_一し_二男_一也_二と_一水_二の_一も_二い_一

志々〜記女子

こぢいりも女房のせんあゝ祝ひ
あゝあゝ 松の木のささけ涼しきよ

福祿壽の賛

長きの日や年終ほし 民の氣は清
く山もや額年あつた 扇も季
室引り地牛の角をた〜く也

宝引の續

保昌うらう〜ひく水と胸あ〜り
衆鼠入腰のまをひ〜いて

上二

引つ連〜松とくら〜お鼠のま

大根画讃

兵せん 妙の〜くゆ〜り子に 那
松の皮やまのさ〜いよは〜は〜く
若〜の〜し告〜尾上の春あ〜し
帯もぬそ 神代あ〜は〜 踏歌宴
軽子帯かき〜り帳乃三枚目

十一日

おけ子をと 還塚 楽終たのぞ
大恩後 誠い〜あや〜を〜ん 樽送〜し

逢神子持せん口ぬく小櫃一の那
漸覚春相泣との切句

削の巻 膏菜ゆり此鼻子海れ
景清、世帯のえちめや二幕
百人巻 雪かきの志のし幕ゆり
さうしもの顔赤白くおたの殿哉
七種やゆめ子 聲のまうしり
まうまゆ臨身うあう 朝あうす
さうしひれ七種打身 雲うのう
沙粒せん水菜もまうしり 初め菜

二人静力かきくも乃乃

なつて哉 扇あふ川 哉 飛出てふ
うの道花 東らふ里の 新の菜
畠く 此巾あふたり しの菜 掃
傘持てつくとひあれし 若菜 哉
長嘯の記をふりひびく

玉も此るらんをむけし 菜 掃れ
菜つららの 白魚哉 吉野川 掃くみう
河州ハ尾嬉そまう
うらうらひやうの年 笑う 若行 能急

溪邊雙白鷺

海不驚 芥川梳了 萬葉集より由朱菴の柳と傳り
ふくくはくく交は

たひくく西の禿てたあくくを
正月廿日冠里公未傳元

葉刻くの上手をと握る 蕨の春
新三十三間堂

のり子やきあめ乃葉あえも木給賣
よまの四判ハ東くり 子美子の間

春杖のかるく能あのみとほりす
ちく川喜あく水や 藪の髓

四十の賀くあく秋あめく

片秘養子墨とさくくをて梅えん式
あつし記枝せんさけあや葉あのみ
うけん考やこく食の家ものそく
小庭にうやしる梅の枝子照のみ葉を
えんくくくをさすめくつんく

梅の心をさくくや賜せんあつし
さん枝のゆきくくあめや強くれく先

等鶴あはれ

やとけおををりあはれあしハ梅の神
百ハのこひく迷ふや言あう先
進上平園張あゆまやうめ花を
あつそりし風をやむ求む教の梅
梅立きぬ人子

不曲亭

あせ強くは目あくも梅の白ひ式
腕押のりひるあゆま子素あはれ

三日月の命あはれしやとけ梅

乙禄十四年二月廿五日聖廟八百齡御年
忌於亀戸法社詩歌連俳令真行一坐

梅松やあはれし教もハ石所

筈木のあはれし是子言此う先

和心水推敲之句

たたく時あはれし月あはれし春あはれし門

白を改名

ふりあの間あはれし障子やう先し星

梅津硯水し子

急ぎ申し梅屋のうらぬ 大京中

宰府奉納

守事の所をいりし所あり跡を賣

元日と三珠冷あぐし人々のせ祝

とのうす

夜光のうら免孔のあや 貝の玉

小袖ももく 付あやん梅屋の

仙石を改書願正の五日のみり

玉笑のうら梅屋の上の

お様あやのうらめは拜と

正

久松肅山亭あり

梅屋のうら愛宕の星はうらひ哉

梅津氏の祖又大坂表乃軍功あり

市感状 赤太刀を以て戴きし正月十七

日の朝の如し上杉峰頂賀木の家臣十六

と通家の風おほくし正月十七日

田の興切あり其家督執権し

けきを賀會あり

幡持のうら其基 服やう免孔を

宿のうらめはいうらあり

芭蕉翁百ヶ日懷舊

墨のう先書やむらゝし世昔うた
氷肌玉骨とあや

草のしみし草うの夢にも梅死皮
うらふたの身を逆りてうらふ那
雪うらうらうのえさる 杉 鏡
芭蕉翁をよみ

字之此書や十日もておちのうら
あししをよみ

雪死子ハ子ぬりけ申云お書

字之此書や十日もておちのうら
うらふたの身を逆りてうらふ那
雪うらうらうのえさる 杉 鏡
芭蕉翁をよみ

市隅

糸とんえく 寫来くく中竹席落
うらふたの身を逆りてうらふ那

茶臼子とてつる画子

雪うらうらうのえさる 杉 鏡
芭蕉翁をよみ
うらふたの身を逆りてうらふ那
削きん

正月巳巳布施御財天へ詣侍奉納

玉棧 登しつゝくや 布施より
糸魚如 漁舟 園よりあひる
志く急の習より 阿のふ 雪く蒼うれ

白し魚露命

月と泣世 生雪魚を 朧 園

志くう 波の色 一のうみりの川う
白く息で 海苔 下迄 買好ふを
水や何よりま 海苔の味
糸魚とくく 水のなます せんやこる

一升ハ一のま 海より 規あり
不印の 流る 流如 じきい規
陽をや 小磯 砂も吹にす

四睡圖

かまろろ 女子 寐くも 靴く如 虎の耳
鼻より ありぬ 目鏡や あふり月
點印 半面 美人の字を 彫て 琴形の
中牙 備くも 波はく 兜て 冠里 ころ
万句 糸魚 卷子 押弘 ぬ 侍る やとく
喜此月 琴糸 抱くく とうく 先代

お出立の馬も松の山馬のこし月おうか

二月十七日原驛

富士の腫都乃木夫 又く巻ん

沾徳岩塚子逗留しく銭あは

句あそいと恨を吹く竹ゆし

松島や志戸かき起ても此は心く

不二の孫よのそまれば

三帆舟ハ培尻舟寄家かき受て

みの詠りあらし物な

孫くその蚕やしちふ日向の南

上十

さるさめや桑の香は酸ふし尾張
春雨やひしれたまのあを枯つし
綱く去く懸くさるるあこの那
この雨身あらしあらん日次うま

本多総物云あり

春のあや子津の歌あは多しあり

遠遊酔帰のかきあらしあは

さるあよる女しるるあはあは

三河小酒井村祝言奉納

あはし編や新もあらし 春日 歌

伶人忠門あつたしやあめり

悼後志 初書り女

昔のなま川音三井もあめり
了のへく世とてこの子春み約

画續

浦島、たりの善の 鶴あか
たのしや大井あつたの
善鶴やて善はさ免て種下し
きよあつし 俵牙つて小橋の舟
苗代や 壁のハ柱の取つてひ

格枝繪る合子

あゝ 斯冬虫 あゝ 稲荷山

禁固ヲ破りて暇と玉ハル

破やえぬくハ銀銭又あつた

やあ入やそれはいやとれ 是ハ星

敷いしや一ツをあつたや弄

やあゆりやもやあつたや

屋入や牛合子とて大原戸て

故未穂主浅野中府監長矩之舊臣
大石内蔵之助等四十六人同志異体報

亡君之讎今茲二月四日官裁下令
一時伏刃齋屍万世のさへはり黄舌
我ひくものや肺肝をつくぬく

画讚

拾得の風巾よりくせや玉帚
うら志や江戸をともれまぬ風巾
支考り遠遊のあり返りきしを
きくると

白河の関よりえんまきりののり

惜春

梅もろくやあまを箕子ちん風巾
まへへんり筏舟すえんま雪の如
歎饒のくぬき都の居返回く
一松舟あ子を送る人平

わくはくやあまを箕子ちん風巾
杉起く富坂みまをみあをる武
洲芽くまへ出山もすあをみ富中の
梅のほつゑ子六分舟なる蛙乃このを
又つ巻る野の草莖あをまへ折る侍る

能狂 能耽 能此のあふめをやと 能心 能那

吉原の初午

つうまや 賽銭をいふ 芝居
はの午子 ちの力 けりの 候をさるりの
は子 進り 祝 祝 祝
いの子 ちり 習ひ を免て せい あり 山

奉納

金柑や 冬 青子 山 へも 稲荷山
爰子 ちの 候 なる 水 間 寺

海忌

人の世や 然し ちの 寺 ちの
月 じ 舟 氏 士 ちの 彼 岸 哉

授記品 無有 魔事

くのり ちの 彼 岸 乃 夕 日 親
不生 不滅 の ちの 終 焉

海棠の 斬を 悟 進 好 さん 像

仏 若 大 悔 日 子 入 滅 し ちの 子 仏
ちの さん ちの ちの ちの ちの
た ちの ちの 生 も ちの ちの ちの

佛しとさくく死ぶ子月おの那

二月十五日上海發足

西行甚死出踏を掃のそく免代
寒食や電下牙猫乃目を怪し
今東とくた客食の家よ自所者
餅配り國拙人こまめ奏して
野老賣了急大系の里ひく
や山草の急しくるり時老賣
弱くめく雪えん僧牙路のた
う免くや此一とち免ふもひく

舟能考や柳とそらま廿路の棠

菜苑

黒竹麻くく我あぬり去草
すこくく摘やつるんやほくし
野角の古道をとらめん土廿筆
匠龜の腕とかりんも去りさひ
山里やふもなるほや作福活
南於年あまふ
傘や萩やあまの阿事か
ぬめり蝶さくく何故するら

見獅子伶有感

てふ志く如獅子無獸志思ふと
百とせハ物々々茶能あふふれ

無車馬喧

夕日新町中よりさふ如蜂の巣
蜂とあや猿とさふ心も糸を垂
葉屑糸巻紙のこほしきし去つて

萩茶

聖堂子こそぬく蜂もたのやと哉
花子やあうり隣子の無死新

山花より中乙多をのへす入日かな

画續

燕や万紙を巣越えいゝおちり

かゝあさ子樹あさうよ妙き壺

川壺 纏さる新戸くんぬれ式

柳燕の図

乙多の茶をうこあす柳の那

海舟とせん虹波もくさる燕のな

茶の水も茶をぶくそ里つて免

け子くくさふさに及ふ乙鳥果露

歸る雁来つきのも古のやあり
小田のへす 鯉もよ〜らぬぞ
市川戈牛追善一子九条のあはれ
ついで侍る子

塗古歌の心文ハあつ〜如雉子の色
世の中をいへはは〜まは〜め
〜何〜しぬ歌の〜雉子の距の菊

角田川舟

あれも其子と尋ね、雉子のあ
〜〜〜雉子の〜〜〜

帆は〜舟のせ〜〜あつ守を花哉
魁やひ〜重し海を〜〜夕日るを

河子川後舟

川上を〜〜〜〜め〜〜
舟身は〜〜〜〜呼子鳥
む〜〜〜〜〜〜
醜子 桃李の詩人 此志ありし
菓子盆りき〜人形やり〜
緑豆のひも志あり〜
〜〜〜〜〜〜

阿まやめやこま年 梶花せん 雞乃こ急
鷄の獅子 可はくくく 逆毛式
順轉いしん子とよむや 鷄あハを
勝是とひくはくく 舞の法水う那
炭の食のあくとあぬねくひ式
毛くろきん子 腹黒きのめを 雪キヨメ々々
老多孔きふこの やきぬ固本丹
割く入くくく 花冠七 箕手あま
王子曲水のりる向されく
春哉鳥帽子子尔きせん 出るいし

上
十六

曲水年阿のき遠き 茶碗のあ
曲水の 箕まるとる 宿あくと
おはくした本兔もあり 雞 雲あ
あつと支の神きつ川邊とあよの 雞
のやといやはひ年対志くく 小 盃
みくみくや 盃月ぬ初まハ松浦舟
上をるく 雞せんまあこの 新か
傳へ来くひちよのたくとく 或喜 錢
三月四日雪ありまら子
雛やそ此 佐野のくくく 乃るらの袖

紙離のさうくしきこちまきこの
孫とくく物ひりたり離れぬ
とち子孫はま宮腰し糸傳らけり
いのうふのやうに

そまはまきお酒かろん輝ひ字
離れも基盤子たじまろくけ
折菓子や井筒尔ありく離れなき
くろくをひきも阿ふまぬ鹿の母
後死ひれ清水坂哉一目果那
ひきくれぬ人をまろくの棧米式

永代島八幡宮奉納

汐子也たつ子くまのまき
親めくむ比目を臨ん汐子くれ
紀国の朝釣つれく志母ひの船
貝つらぬ白洲若未能あつま松
魚あつらやうのま上一く水の栗
たまきくく蕨ハまめかきま貝
貝めく貝とむまのつら哉
阿まき貝むほの紐くくまめ
海まきや浪花のまきくくひの貝

菰得や塩漬りゝまゝに好くさ貝
寸た達貝雲のさ候み〜人々
子安貝 二見み浦を土産酒式
貝を送人を送り終し子

蛤 廿七のちもさむの串を片物
鉄槌をりし礼の〜 羸螺のかく〜
ゆきや 且那 臨〜 夕下〜

東潮留至見翁

出代や人おくを終るも連衆あり
傀儡師阿波の鳴戸を小〜

伊勢の舌津を道傳る

る糸糸糸子越ま門門や 傀儡師

西諸沾公内庭牙々

麻的糸子ま〜いんむ月々さつ様
皆是代志や 鏡り乃と我和さ〜

一草を磔上いし招く連て

さつ様天狗然のゆさみみきん
いさし〜小町々妙のみをさ〜ん
猿の〜酒をさ〜め〜様阿那
系中へ地金のさ〜〜や 龜去〜

仁和寺

いぢあつゝの屋より木ありし椽の孔
ハッるせん山みさくくも一沈

雨後

さくくちる涼生又日ちわきれま
はくく狩りまも目悪め志く人きよ

妙鏡坊より花送る遣し

文ハあつ子椽ありし出と使の眺

上野清水堂あり

清くけく志の由 生盡れさくくは

折子殺生偷盗あり

阿さ也と志尔五戒せんさくくは
志道ハくしそあつて貴由はくくは

上野あり

浮助や 豊徒又子ゆく椽 寺

芳野山ありして

の星やさくくはくくはぬ山くく
口ひあはれし魚より汲くはをらる

大悲心院の花と又傳り

灌頂志 園より出く 椽 あり

酒花さあれも機をたけあむ入身
下外牙凌味えせと志ゆさくは
墨染子綱彼法くいつかこちん
身成ひきる縁ありきる系はく
浦人の花びりらみく

らる時と斗子買ん様さくは
花中尋友

饒良く人とさるつと山法をら
山さくく後也く僧あん
やまはくは猿也くはくはく那

石河氏宜雨云能山莊あく

二とあゆ乃く角豆くやさくく
ひまも子乃繪持く山法く

目黒松隣畫りて

浮世あけ林下く記ぬ屋も機
小坊金和松子かき進く山さく
去るの車にそあや山法く
卒未の表上那子整く白門金薔津の
くをあけて世上一時愁眉ひと海く
其弥生そ此二日持や山さく

會秀亭の茶植るへかみ

植尼子三切の供如 山を九

勢多春望

山はくくく身を泣くく乃換子式
茶のひ子此喚鐘をやま 様
萬日の人かちりくく 運くく
一食千金とくや

此の酒乃何五あちぬ法く
友猿のくくをくくひまな茶くも
縁くくは志あくくおのあやむ能く

沼坊や花能くのけくくあまれたり

行西諾公あくくく一海浴亭のし

照息子阿乃むをれと山次り那
茶多もくくはくくくあらん別あれ

會秀亭能く少あくくくは供くく

はく追習や花の志れくくかくをく

花ひくくたのゆくくか北の手出く

地くくひや志の外くく松くく

讀莊子

波是ハ山嵐雪の偽 志れく

門柳菘と挿ふ折ふし雪等啼
 花見式 母牙つねの山 亡目 児
 護国寺に阿ふ時ふらて遠くられ
 身と嵯峨
 大佛膝 くの山をらん 女
 世の花は五年 己の御衣 女
 懐色蕉菘
 月忌や 修禱の寺社 残りあり

正 廿四

傀儡世の鼓 くの山をらん 女
 森よととれし捧つたはつる花の山
 花子 遂く 親達ありん 都 あり
 立君をとめを達む
 されありく 金よ下人をあつるも
 徳刹狂人いりしや 世のゆき
 人をも人を急めさるや 花子
 角申のふとふりあり
 花見 あり

ちりりしる如く 鱗皮をとりて けしき 足のか
ゆるみ けしき けしき 人 けしき けしき
九条 藤 下 向
傳 奏 可 みの けしき けしき けしき の 門
雜 司 けしき けしき
山 里 けしき けしき けしき けしき けしき
と けしき けしき けしき けしき けしき
屋 形 けしき けしき けしき けしき けしき
意 馬 けしき けしき
立 馬 の けしき けしき けしき けしき けしき

永代寺池邊
池邊のむ 大牙 へ お けしき けしき けしき
と けしき けしき けしき けしき けしき
侍 座
む 子 けしき 表 書 院 けしき お 月 代
神 力 品 現 大 神 力
法 の けしき けしき けしき けしき けしき
と けしき けしき けしき けしき けしき
惜 蒼 不 掃 地
家 奴 けしき けしき けしき けしき けしき

日輪寺の僧と對興

花を酒傍やもひん坊さのま
花ハ都も此くも友をちりり
かんさしやあゆく公のおりにも

上野侍

わさり侍士んまくく後のおん代
酒を妻つま我妻あんろりえんれ

妓子万之節を供

その急子あつてあつて小盃
むす来く朝暮のはり成

代推

彫笛逢葉茶牙晴を空浮せうれ
車牙くつ急んをみるや東屋

尋花

植木屋此亭主為主之をい
あのかくと花の名あや

湖春波の

後くも短尺もあつて花を
甫盛ろく先く上京子

花を濃伊勢と志んく重衣移

名きこのりや作タテ急五郎 花定め
行西踏云年々蒼とあつるこころく違ふゆゑ
郵送ゆへん使者のおるる月と哉
そね下けくやうくひり寺集り
若子鏡おとこのま久喧嘩置
客すきやあつ後を若子浮若主
榎島
花風や天女負進くよあこころ
宰府兼詣の舟中
此来のより此の小坊重なり角あつる鏡

海棠のあまんうほくおあつ月
山吹冬黄玉青玉 若くそくま
三月正當二十日
やうぬきも柳乃糸結くみ成
月雪牙山吹花のまあ能よし
浅草川道遙
鯉の菱ハ山吹まのぬやまゝね分
小鳥あつ糸書乃糸つり山
こゝろあつ糸書新あつ山石ほし
且夕のほくおそくおあつ

亦是らり本屋一見世は清くし成
まじり志ます豆腐と切く捨る如き
紫舟の里ハ茶搦も水きり
ふ者を酔みそ子つるふ粟下の那

画賛

友みあふまのままに歌いし世あり
ふち咲き松魚らふ日とかさく人ら
水乳や鮓こころふ姉もつるの柳
錦めも 為る風ハ憎か
とと子みぬるの五徳やふら凡家

秋航庭を中せしむる子

たそこのまや散うるくは扇を
ころは二浦と侍遊子なりく京使子
そまらふみ祝し

後浪や廿七人 子腹とを

うらうし二かき何啼江の星乃教
ちんく引蝦子とあふたあまこ

市間喧

つぎ本屋の手あはる是妙く 雨蛙
景改々片目試むるふ田螺の那

あり入女子の名をきく
 了りや事らひ子あつ蜂之助
 休不増の巢かきし弦子
 なごさけのさくら三八宿とこそ
 何必逃杯走似雲
 此花はたこころ遊をもあふ架成
 龍樹菩薩の禪陀伽王に對し之貪
 欲と志あしあふり事とて人そ有瘡
 人此猛煙始雖悅後増苦の文のそを
 有瘡のいふれ時えし御法つ乳

上 廿九

摩訶止觀十一日之羅維不能得鳥得鳥
 之羅唯是一日ひふのころ後
 多るをり急法しり乃ゆえん哉
 南村千調仙者へか魚乳子
 此書如独口と破島はつと神具
 三月尽
 考ふ糸く考法送れ牙公重や

夏二部

凡光前我若吟身

大酒前あきいてまはるき 裕ある
一とら子裕子あまや 思ふる重
越後登尔 绍くきや 更志
卯月八月母子あく被て

身ふとりく衣うき 卯う
ぬらうやら子子親考こはも
は細も志るの下る如 更衣

寄甘已

白禿もあつらうり我志
奉幣使使代参の人能あき

あつらうり伊勢まき 誰う 更衣
乞食哉 天地をきく 夏うも
うらうらあやあや形まきあも 新云
有明あな面起とや あま
後あまや夫もあつらうり 子 規
後 這星 吟 けうらうらや ほら
歴くや 下馬のさうら 吟

川むらひ誰屋あへりや
鶴啼ゆこの阿のふと子
あうまの氷るを法もあ
百間長をめぐ

時より人死つゝえよ
下る打
りやゝたす一二の橋
院感々三味線
亦打山

おとてまけ釋多々太鼓
き熱くしの用意、月舟
杜宇

寮坊主のりゆく淋し
鄭公

宰府奉納
かゝ記する君くと
林中不賣薪

世子なくや山
禁寺 五加り
さらけらる村

くぬ山林場の日
曲終人不見
あふ川をの反吐と
杜宇

たれとけきとあはれとみる曉
 夢子来た母泣る色をり敷く
 中々もつれあや氣子に思われん
 子もふす 枕もぬまひ 蜀 毫
 担風の妻を供く 契海へ行く
 するの同妹と云う人せほとて
 又采とあはれ
 蛤中在やの籠多り好く如子親
 それありしとあはれ馬や時
 悲滴に現子来た海へ行く

入間の四月もあはれなりとす
 あら人死に子に好く中々これ
 伊とあはれ 懺悔と先よとすめり
 月清く腰ぬき風呂や子親
 六阿弥路のけとあはれん 鶴
 樹子と樹下
 虫つりぬ 銀杏もとる 敦く
 夢子とあはれかき進ぬ毒や時
 子親と有り明く 暮らつ好
 知くきん大哉能き子親あはれ

目の上牙目をかくくや敦公

夢登

砂目子寐覚哉阿人馬魂

姉崎の野夫忠孝心をきき

めされく秘をあらりて家より

起くきけあの時を市を来記

物く交す二あるめりハ出馬これ

阿方くあてく蝶々よりほく記す

寺を守る衆寺中危ありし子規

山田市之患

ちのくしと海をほくくや杜宇

親きく耳をやくせてほくきん

我白人志くは家と鳴くあハ鶴

証かんくひる破時を孝孫戸子

阿連くしと鶴まくまつれて子規

明のい啼きくし一了念を

敦公中入まのて死ともを然る非

さゆくそ木兔より人時鳥

次广めく

厚く記をるも鶴亦たの浦津記

屏風子菘房の位すの家の和
送ひ子此之位をあり 郭公
子此居や火子神書を隠者鳥

上行寺 二句

灌佛や拾子別 古の兒

信仏や墓子むつる部より云

佛々々このきるはくくく

志々々やうあを生れ出まらん

麦飯や母年たうせく仏生と云

神の志やいづ達の御所乃加茂詣

う乃花や蛸く山荒乃のうま
蟾とあんとお神の心を悟り
年々くくくああのをく此物ほけ
舟あ乃均しを吹や夕 恙紫

慈母墓

系水牛うらしくくく 茂葉那

僧正 孫まふひとんや くの楓

ゆかしのあうらうやこの牡丹持

河州観心寺

楠の 禮ぬうまくく ほさん哉

うかき女や異見子涙む夕牡丹
筑前江を

志々め火煮の鏡下うつ牡丹の乳

丹羽左京かろのよの糸糸を

黒牡丹糸のやぬり世の大鳥毛

艶七子めく

ハ専成うつく可笑ふ牡丹の巻

あさめや驪山を名め深ん子

宵柏の行状とあつ免ん集編る人子

はくすじ角子火を毛寸深見州

殿つくり並くゆり桐花の糸

紅毛未貢乃曲く奇形りく

桐の糸新後の艶艶を名の以ん

そ日子かき糸淨瑠璃履や青い廉

下洛郊月の中乃一日

隈岐履のかけぬりんを鏡山

帆をあらは糸糸松魚の磯かく

綴糸糸の臨り己日のそと糸

夕志ややのつる糸糸中か

こころきれ糸糸昔あくうつ

和重翁は

伊勢あとも 松魚なるし 酒迎

たのしみなる多のそんごふ

うゝゝ森のあまみゝゝゝ 鯉うな

あ鯉の卵を中死ぬらこの世

人のまゝく戸新しなかつを式

魚市涼宵

掃きぬの夜を清くは 松魚ぬ

光廣卿のあをとおのあ合作り

松魚うな先まぬあを袖く拭

本質

名所は海をえんゝゝゝ 松魚う那

袖直衣や 茹ゝをけず白く李

浅野お義士ををむさむ

沢沼おを 鏡を引たりつあまつら

杜つあ 夢へ 水きき 土おまてり

あきつらひ女 雪結をかゝゝ 跡を

ひつらゝの 珠もありけり杜つあ

さ魚まける子 提素あゝのまつら

護国寺糸海をよ

水漬子 ちりりいこ 何とぞ 杜若

奉納

のう衣は 氣や 加きくゝあきり
あー此志 朝精進の 洞きくま
そふさうい 風をたの けしきく
蘇子いん けきま 臨ん 頂法いん

祝産育

たうう ちの皮子 膝の 孫つゝ
筆よ 糸きり おくよ 犬あき
筆や 丈山あし せん 鏡の 鞘

大町亭法會

法のこめ 筍羹 皿も かくこ 式

寄幻味長老

老僧せん 筍も そのむ ちあきこ 式
ころの 糸や 鞭牙り けりあ 相根山

志ちのひさる 法隊の 梅下り

く先いん 川 洞伽の ちあきこ 玉あき
傾城せん 友 出るあし や ありの 宿
帯へ 合相の ちしや 浮世 友とを 从
みく ちや 朝白ま けり 納金あき

岩翁亭歌送蟹

くくくくくく隣へもくふく蟹の足
嬌志くぬ志くくくくくく鳥麦
馬士起くるくくくくくくくく
麦子かあくくくくくくくくく
能化堂麦つく僧返くくくく
聖子麦津尔年と笑くくく

田家

子乙女子足あくくくくく
汁濁りくくくくくくくくく
早苗くく

上
三

木質入湯の二派

志所くくく子苗くくくくく
田植あくく水茶をくくくく
台相あくく友くくくくく
早乙女あくくくくくくく
招細あくく子苗穂子出くく

桐葉

鏡鑑の脊中あつし田子取
幟細伸くくくくくく
くくくくくく幟甲也
庫のくく

形子舟に赤糸糸のつゝく、孩の如く
幟と川長者のふや、つゝ思牡丹
疱瘡の海とらば、つゝ牙能あり式
若阿やえ、幟もあをれ、嵐もあ
公門ふ入時
あやえんく、つゝ子のみとら
銭湯を、海とら、つゝあやえん
つゝあやえん、あやえん、あやえん
と、俾勢大補、あやえん、あやえん
葛と、つゝあやえん、あやえん

二下

本つゝ、つゝあやえん、あやえん、あやえん
きり手え、あやえん、あやえん、あやえん
根合や、あやえん、あやえん、あやえん
花 筈

廻文

けきたん、つゝあやえん、あやえん、あやえん
此友や、つゝあやえん、あやえん、あやえん
あやえん、つゝあやえん、あやえん、あやえん
つゝあやえん、あやえん、あやえん、あやえん
我、つゝあやえん、あやえん、あやえん
蝙蝠、つゝあやえん、あやえん、あやえん

屋根ふきしなんく甚旨る 昔より形
糍っりん 譯もさめきや 縁のあり
ちまもつゆふとらふと世々の葉か解せ
おちまの女乃塔はま入て文うくさ
山無の糍やも先く 偏をくさ
くちの戸やの門かす子乃のひ糍
午の逢午の月午の口午の結かけま入
競馬 埒入り入力死いさうしうも
いあけひまあちのるいあけひ
さうしう神のり名もこころをよ節白前

五月雨ふきしなんく甚旨る 昔より形
糍っりん 譯もさめきや 縁のあり
ちまもつゆふとらふと世々の葉か解せ
おちまの女乃塔はま入て文うくさ
山無の糍やも先く 偏をくさ
くちの戸やの門かす子乃のひ糍
午の逢午の月午の口午の結かけま入
競馬 埒入り入力死いさうしうも
いあけひまあちのるいあけひ
さうしう神のり名もこころをよ節白前

住 屋くはさるい 深川のおた雨 五月

是江戸の系

等 帚木や人馬 今さらつれ 五月雨

呈露江の銭

能 ぬくよ田子 孔のまをさめ 五月雨

燕 ちもあらく 急ぬく 五月雨

さ みやと種や 是めも 五月雨

隅 子るまと 五月雨

之 結や 五月雨

五月雨ふきしなんく甚旨る 昔より形

何れや海の通ふ山も多かり
 五月も雨のころは雨も
 糸之乳も
 又も雨やうもさにつれ 小人形
 さみれや酒匂くくする 初節子
 嚴宥院殿の大法師をねいませ
 五月も雨もやとむむ 法の
 七十餘の老翁酒男まうりく
 こそりく位まへ 早に追善のり
 こそふらの老醫のい戸をうけ
 又もさぬ人ぬもあはる
 表もむむ

五十一

志く古来稀なる年にくと
 とかくゆきさけり
 六尺もしりく
 五月雨
 雨の鳴
 微雨の震る度一
 何れもさすやん
 五月雨
 糸之乳も
 雨の尻を
 竹も 酔
 下書や 壺根性乃
 糸之乳も

腰越

篠すのま 厨火汁とあま森のみろく哉
傾廓

八云未也 ちのうさあまの虎う雨
けふの山りしうま何をと閑古き
風あめ未あ志月くやかまこき

僧正、谷

侘しらう介 貝如く傍よらんこを

自愧

おあまをと母森さうきき水雞代

多驚啼 新米す遊女のつやめ哉

和古詩

琴弦燭く水雞を煮夜酒淋し
吐ぬ鶉のほむら子めれ 舞一那
移身つれて一里ハ未さうり 思の松
不婚を電うや子決めくうあひ哉

杜園 改心とむ

羽あまを多啼きうらうそいこ一崎
あま入れおの髪あまく

内川や啼のこまの菓子形く棲

新白子七里を歩くより必古屋鮫
乙の枕子鮫也阿り多ふくの茶屋
永代島の茶店子やあつして

明るり神崎も通く鮫の甘皿
湖舟錢牙酒たうへて

貫之の鮫のすしくふわりの乳哉
飯館乃 鱧なるはしあみやこ代
岩根こす鞋牙鱧あり 走鮫

此れ中込志くはあしうく小餘賣
ちうく通うた

更る海し四ッ手糸いなる光う那
目通りの園を扱や 从あさあひ
友川牙を務らう仕出をの責子武
批把の養也それく角あきの鮫牛
辛くぬ 兔の耳や果らうふこ
酒乃さうれ子 這をらう
漁倉や野はしん角か 蝸牛
文七牙ぬまか子色のくらうか
串を免くや糸尔生くく 鮫牛
茶の戸子糸を葉多くふ 堂のれ

宇治めく二句

紫の舟より赤の舟へさるるれ
川くさや水子二重にほく
帯志しきよのあつたに
あゝあやうき子小女告やん

二まのうし

江波 哀まぬ
恨はしらす子まれば浮橋うら

愛娘子

鶴啼く玉子とふ坂をたうり

鳥山へ松のむく人子

青柳のほろむく人子
市北飯屋のりよき人子

皆つくりき果う川をその坂やり
萩もや寝ん紙帳平風を
夜讀書

坂とく山や枕のりよき人子
本北を

松賀秋帆山石城へ
のり火子狭箱のりよき人子
蚊巻火子夕白志あし
橙

酔く忘

骨の蚊も枕とくく家八あう乳
生死本末

鳥切蚊をひらくりきあゝ急

捕虎 東坡

七ツ危の蚊身くくも足疾鬼
あやり火や蚊帳つらうよ老ひり
蚊はやくや麩衣奴く圍ちん 私終

佛骨表

志つらき蚊と打ちり韓退之

射ル者中ハ変流者勝ッ

蠅打よひつ連糸あは海難う後

位法くまわくく人死銀子

梁の蠅はあくくまうのう

蠅はくハ一糸をくん 甘き氏菊

去らん所きくくくくも

蠅追ふ牙妹くくれぬや 瓜作り

西霍う矢數能諧子後見たのくく

漢語あく二万句此蠅ああきけり

不二の各蠅ハ 酒を子のとりと危

隣りし此木あしくむむ勢又張る
糸の掣さし能ふ志不た時も何り
蟬蟬子空谷の何れも一々の
ありありの物あらんね色くれ
うらむことの松子

夏虫も其心こころれくる命を
山ふ長の句をさうき

たらしふ乃知らるる何れも種
まじし白ふもまゝ実まゝ陳皮まゝ
交代の若草の種やうり 柏

夏木立哉 池上の 破風 五寸

建長寺無詩俗^マ入^マ

夏木詩なり あり何れあり夏木立

夏木に酒池の字ありは免く涼を挽

とてあるをいふありこれハ

夏木よりこれハは魚とて女之那

或人の後志と云ふの例とて

あつれをいふと云ふ冠者子眼うれ

夏の夜ハ藤あやみ疝氣の何れも危

なれり 故我をいふとて女之那

日待發ちしけくしち子逐ちらるる詠不
ひり焼火とらうきなる難きこと
しみの下子おけひりりやあまの月
雪の入り月やちなかりと不二の山
浅草川道遠
富士めや細代ふ火あまのあのお屋
あまをふあまをふあまをふ
と純くく又くまうりふ不二日記
水やや里蕙の紫志はし日記
あまや橋其家とくく河通と

了舟の讚

了舟の舟 膺くかゝるをを後入る
楓子居
舟の舟やあまかゝるをを御用草
麻村や家錢くく水くく
三葉くくかゝるのその俗世の奇仙
と重出くく点ぬありて
くく志きりぬそれ世のおくふ
あまの舟非人をあまの
麻蓬
あまの基をりありのあまの舟

百合の茶をくまぬさね子うつあきぬ
蟪蛄の小野くまいしく車百合
みぢ買や初見しく茶と夕日乾
望相員

をらんの子のらんはあり日々思ふ
ひくく海や猫の糸目子たう移のふ
ふあもと不鳥子ま川 價う那

祐天和尚子やす
夕白子阿くまきとかきと賣名号
ゆの海やふきの雞 垣根く

画子歌子

夕の海や一白のとあ 若れ宿

酒満

昔多美女の酒典 とき子も 二面
藤のむや金と魚子あふれいよ藤
遊女小笠とこの勢て鑽をまあれし
もれく船や弦子あうけくさくさあ
藤の女や海老親も袖よさるる

茂叔賛

傘子蝶 花連 所立 藤ふ子 榎の那

詞書畧

香一炉 蓮尔 跡を 色にけり

得正觀世音像

手牙蓮 膠子志戸 ぬ白ひら那

妙法蓮華經

たんのりのや 法のもろすの華 經

惠まじ法師は法花の華受りて

とを庐山の冬をゆきあつたると

玉阿くして 爰て 華くき色 白蓮社

江坊の 氣えん あり此 蓮の 子

上

靈夢 感して 東湖 舟や 天子 詣侍

出ぬ 弟を 登り 欺く 進て ても ちか あり

荷切や 下手 ぬし 切く 茎を 角

藤くく ちん 蓮月 何そ 子 釣物 ちか

漁妻 孔香 尔 杉乃 ありし や 柳 流 山

菟有裁

海松 和布 ちか 聖の 腰 兼 青角 豆

みく 此 冬や けり ちか 風 ちか 磯 訓 松

強念の 漢出を

波 委ふ ちか 貝 ちか 出 ぬを 海 ちか 子 ちか

瓜の一花

この世に誰あやまのく瓜持系
あつらひは塩茶乃こり瓜の根
あつらひは鏡子なりけり六皮す
おれは又泣出に志桑より
あつらひは瓜の志つて成
瓜の皮水えくもて身流連り
酒をよむ瓜買有ゆ袖も乳
龜毛子錢
うりの皮も立身重しとかきまき撃

冠のやうなる法海もあつらひ下は
そと祖神もあつらひは関係く何某
のりやうりんあつらひもあつらひ
あつらひも食養生あつらひりやうり
瓜やあつらひ乃生油あつらひり
干瓜あつらひるあつらひも黒ま白
瓜あつらひりあつらひて干瓜あつらひ

豊年

あつらひ味香牙あつらひは瓜あつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひ

皿鉢平 駒の 蹴めを 心 左
手子とまゝの 林檎、油ておのし
百日のあくら 蕨しや 阿の 裡
百姓乃 志向う あら 一 束 酒

酔登二階

酒の瀑布 冷麦の 九天より 落るん
ゆやゆきや 下り 下り 下り

會盟

交りの さえんて 赤の 夏科 理
手子かろく 葵 摺 小 木 末 下り 那

止波浦めぐ

地引すと 壺の まよく 善此 汝
野焼を ゆの 金銀を 好き 衆の 衆

去月のりりりりりり

幕末子 昔の子 夕の 會の 那
昔の生を 赤い 夕の 會の 那
樟脳平 代 沢の 川り 柴の 鏡の 那
ゆめり 昔の 夕の 會の 那
捨人也 木の子 赤の 會の 那
うゝ 藤也 掃屋の 夕の 會の 那

市原より

虫も動し朽木此小町丁まつら
新衣就きく阿ふんあみまらり去用丁
法のみ急転れしき臺虫の山屈かき
宗麻のりやと情多しり文のまらり
送りまのやゆのりしあめりゆり
生れ松いのやうにまん汗あつて
死の海を汗あつてま森あつて中太
款仙貫之の古昼子
冠を指さるるふらり 哥の汗

汗濃さよ衣此背縫のゆわくはり
灸さあつてゆわくはり 雪此あつて
ふるや内儀たましく 抽詣り

市中白雨とみよき

鳶此考ゆのりあつては牙醒し
夕たちあつてはあつては鼠の子
白雨のりあつてはあつてはあつて
雨をさるるものよかつては
夕まや田をえぬらり此神あつて
ゆわくはりあつてはあつてはあつて

舟中喟

さくらの木の筑波鳴出く里急き又
夕たらぬ法華の巻こむ阿の巻
ゆかちらぬ洗ひかきふる古き色
白雨牙独活の巻ふひら支白う那
夕ちやぬぬの巻かぬ坂との海く六滝
湧き芽の巻子阿の巻く晴るう巻
ふるもや巻^{イナ}知らぬさきい 芽は系
ゆかちらぬや巻を巻くあふ丸徳俱師
夕たらぬや巻を巻くうらま子巻巻巻

八雲の川あきの嶮嶮哉 雲くは雲
橋挽きんこく巻くあふ丸徳俱師

高閣挽涼

香藿散大々新の川く雨うの峯
西行く武蔵坊より巻く法水う巻
めんあきの巻く 法水あきの巻く
あふ丸徳俱師 巻く巻く巻く
刻く巻く巻く巻く巻く巻く巻く
巻く巻く巻く巻く巻く巻く巻く
巻く巻く巻く巻く巻く巻く巻く

元角田川半田と云ふ事あり

いふ事あり清水ありけり手前橋

井子かきつゝ女はなほけぬはやあり

教あるよ清水を成り守るの長

而諾法公能真行

日子やけく酒のこもる清水系

世にありてありの徳ありけり侍

ひそくすむ友子腕の積雪清水

清り溜りの判談をいふれて

此論を一草をいふ事あり

山差義の赤寺の御帳子

清りては道振舞水をいふ向る

紙圍殿のかりをまわす事

杉乃葉の青水毎日流るるれ

里れ子も教ふらふいふ事鼓の水

乳の免く清水ありけり事

七日

絆ふあのお人のまはひも 朝の乳

山王氏子と云ふ事

系もまわく天下系や玉くさ海

番付を責むまのりぬきやひ成
松原年・田今ふはりや登休と
瓜むひく粗年くふさるあつさ成
蓮の葉の赤鱗を炒く暑一の乳
山銭り歌せん痛の阿可さいぬ
蠟うけの標丁あつし日星ハ小
小女乃常子くさるぬあつさ成
冠里云備中松山初入の時
川と暑や浦の昔屋能軸うり

二
中
林

傳九前々持し扇子

朝比奈の楽屋へ入しあつさ成
あつさ成乃木絨子さぬ暑うれ

呈露江公餞

供あつさの鞘あつさや世せん松
舟暑く一尻あつさの粗く園の顔
身あつさむ一重羽織も浮さる那
何と羽織縮緬ハ重く紗を極
昼さるりのさく
うさる麻改巾

抱簞や新あかえく 涼のよきよ
曲水の猿宿子湖水とありふゆ
連や 阿あし 表紙 にくゆ
うきもの 風情 月身なる 雲扇
紅 了くも 乃あけの 白ひく

小町の賛

腰あけく 休むる人 大団扇

破扇の圖

維光 後架へ のちし 扇なる
鳥飛 紺衣あき 紅あき

あは粉子 風の垣なる 扇一の形
あは 涼方より 葦衣 ちりぬる子
さんせよと 阿あき

新鳥や 阿あき 紅あき 阿あき
とあき ちりぬる子 重ひく 阿あき
涼のよきよ 扇子 賛のよきよ

涼風や 子市を まあき 女形

序令は 阿あき 上系子 阿あき
涼のよきよ 阿あき 阿あき 連し 金
すく 阿あき 阿あき 阿あき

所見

蒼々家々日星の川邊死せる人哉
霜のりの文張る水

犬山のくくくぬわとを凍るれ
夕暮海すくくく支風の誓か首
少津を能くして不死の青とくく
此舟牙老くくくくくくくくくく

布袋袋の綴

藤くくくくくく子とも起る子夕納涼
海をくくくくくく凍む角ありく鬼尾

浅草川歳々吟涼

世人教舟をれくくくく涼くく那
何くくくくくく子 泣ぬ糸 縁か子
涼はむ安房や上総子舟をまじ
くくくく帆牙船匠のちくくく
子入く手鏡欄干や 櫓くくく
すくくく先船くくく 燈乃流星
能くく玉子くくくくくくくく
韓退之捨酒吟あり
酒不守舟くくくくくくくく納涼く那

牛御前

是やとね雨を守人 下りて

銭久松肅山

筆をさしんはかきや かるまの 下涼

人死子をあそく

涼しかり麻くはありそれゆめん

画契

大虚すし 布袋の指せんゆく所

日枝子むあひあふは種を

十八のゆ種 つるりすく美らぬ

河原あそく

曉は牛さんさる見 車一の那

この松身あそく風あり庭涼と

勘あぬ月あそく涼と或

人子まこ 暑い顔あそくは見え

自棄

たうそめを鈴起ひるひ子すみ

上下と裸の男はあそく

解をとりて守入り

うまふのさそく 交中へ 解を甲

とねむきの一白紙扇子のとら籠
生れ松原乃かこさす

木乃路くハ涼しくま味をたぬれり

祇公日次の影をさりぬハをく

河美垣 徳利もゆらす 侍の音

遠浦の猫舩押あがりしこ乃

櫓のこよ入

帆波あつる 鯛をいほさきや 葦の風

夏藤やあつる 雲こよふの 栞抄の

子代肩しくつとくむた 夏 早

青流亡妻をのこし

園女しとこれや 此世後夏の海

夏瘦子 熊目志あも小食あり

葦年貯くや 六月 鄭 公

菴の留守

すひつとくことおふ夏の 炭俵

隣家子樹をさく入ぬりその四時先

故とせさる中をさす

何ういせん 六月 相波う急ぬ人

谷木^{カッホ}鬼をのこせとさり 笛

市中の寛陰いこころに花が
秋なるにさくら太鼓や 各終る

御後

夏後 法師の宿札さくら子さ

大雨大風

吹降る台羽身終るく 雨後うれ

刺原郡加快書

關 和平太

正 六十年

100

